

英語も日本語も原理は同じ

この考え方は、わが国の“漢字”と“かな”との関係にぴったりと当てはまります。まだ文字というものをまったく知らない幼児に、“莓”という漢字と“い”というかなを一緒に教えてみますと、幼児は例外なく“莓”を先に、しかも容易に覚えますが、“い”の方はなかなか覚えません。その理由は、まったく strawberry と“s”との関係と同じで、関心の強い“莓”は覚えられますが、まったく関心の持てない“い”は覚えられないのです。

『初めて文字を学ぶ幼児にとっては、漢字の方がかなよりも覚えやすい』

ということを私が発見したのは、昭和二十八年、今から二十七年も昔のことで、ドーマン博士の発見と同じころです。

それで、従来の『アルファベットを学び終えてから、単語の学習へ』『かなを学び終えてから漢字の学習へ』という教育とはまったく反対の順序で学ばせる教育法を、“石井・ドーマン方式”教育法と呼ぶことにしました。

このことは、ドーマン博士が初めて来日されました昭和四十七年に、私が博士に提案して同意を得たものです。この時、博士は笑いながら、『ドーマン・石井方式と呼んだ方がもっと良い』と言われたので、『日本語で言う時には“石井・ドーマン”で、英語で言う時には“ドーマン・石井”と言うことにしましょう』と言って、笑い合ったものです。

私の発見は、指導主事をやめて、初めて小学校の一年生を指導した年のことであって、それが昭和二十八年なのです。

私が指導主事をやめて小学校の一年生の担任になったのは、“がっこう”と教えないで、初めから“学校”と教えた方がよいのではないかと、かねてから考えていたことを、ぜひ実践してみたかったからです。